

No. 53 pp.934-957

30 - XI - 1988

寄せ蛾記

埼玉昆虫談話会

YOSEGAKI : Saitama Kontyū Danwakai

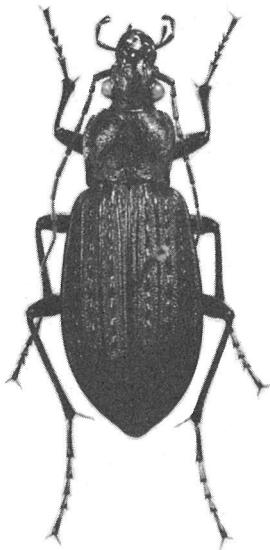


表 紙 の 昆 虫

アカガネオサムシ *Carabus granulatus* ssp. *telluris* BATES

築比地 秀夫 採集／撮影

詳細は、本誌 p. 948を参照のこと

.....【連載】

いるま蛾報 (4)

井上 寛

.....

第4報では、カギバガ、オオカギバガ、トガリバガ、ツバメガ、アゲハモドキガ、フタオガの諸科で今までに採集できた種を報告する。

カギバガ科 Drepanidae

Auzata superba superba (Butler) ヒトツメカギバ

6月と9~10月に、やや多い。

Agnidra scabiosa scabiosa (Butler) マエキカギバ

5月と7~8月に、きわめて多い。

Nordstromia japonica (Moore) ヤマトカギバ

4~5月と8~9月に、きわめて多い。

Pseudalbara parvula (Leech) ヒメハイイロカギバ

まれらしく、1980年7月8日に1♀が飛来しただけである。

Microblepsis manleyi manleyi (Leech) マンレイカギバ

これも少く、1977年5月21日に1♂を得ただけである。

Tridrepana crocea (Leech) ウコンカギバ

5~6月と9~11月に、きわめて多い。当地へ移り住んで、最初に私が採集したのがこの蛾なので（1972年11月13日、1♀）、一番愛着を感じる種である。

Callidrepana palleola (Motschulsky) ウスイロカギバ

4, 7, 9月に、やや多い。

Oreta pulchripes Butler アシベニカギバ

5~6月、9~10月に多い。

Oreta turpis Butler クロスジカギバ

1981年7月26日、1♀と1984年6月14日、1♂の2個体しかとっていない。

オオカギバガ科 Cyclidiidae

Mimozethes argentilinearia (Leech) ギンスジカギバ

1980年6月18日に1♂をとっただけである。

トガリバガ科 Thyatiridae

Thyatira batis japonica Werny モントガリバ

7月にとれるが、少い。

Habroyne pyritoides derasoides (Butler) アヤトガリバ

9月にとれるが、少い。

Tethea ampliata ampliata (Butler) オオバトガリバ

6月にきわめて多産する。

Tethea octogesima octogesima (Butler) ホソトガリバ

7月に、やや多い。

Parapsestis argenteopicta (Oberthür) ギンモントガリバ

1977年6月4日に1♂が飛来しただけである。

Epipsestis ornata (Leech) ムラサキトガリバ

10~11月に、きわめて多い。

Kurama mirabilis (Butler) サカハチトガリバ

4~5月に、やや多い。

Neoploca arctipennis (Butler) マユミトガリバ

3~4月に、多産する。黒化異常型のあらわれる頻度は、かなり高い。

Demopsestis punctigera (Butler) ホシボシトガリバ

1980年4月12日に、1♀が飛来しただけである。

ツバメガ科 Uraniidae

Acropteris iphiata (Guenée) ギンツバメ

1973年6月4日、1♂と1975年9月17日、1♂の2頭しかとれていない。

アゲハモドキガ科 Epicopeiidae

Epicopeia hainesii hainesii Holland アゲハモドキ

6月と8月に成虫が発生し、昼間活動するが、よく灯火にも飛来し、特に第二化は数が多い。

フタオガ科 Epiplemidae

Psychostrophia melanargia Butler キンモンガ

8~9月に、きわめて多く、昼間盛んに飛んでいるが、ほとんど灯火に来ない。沢山の個体を見ているが、九州でとれるような白色型（蛾類大図鑑 pl. 110:9）は、まだ発見できない。

Epiplema plagifera (Butler) クロオビシロフタオ

4, 5, 6月に、きわめて多い。

Epiplema moza (Butler) クロホシフタオ

5月から10月に、きわめて多い。

Epiplema mozzetta Inoue ヒメクロホシフタオ

1974年8月24日, 1♀、1979年5月27日, 1♂、1982年5月11日, 1♂の3頭しかとれていないが、79年の雄は、本種の holotype となっている（蛾類大図鑑 p. 578）。

第1報（本誌50号, p. 805-807, 1987）でスズメガ科をリストしたが、その後に次の2種がとれたので追加する。

Hyloicus caligineus caligineus Butler クロスズメ

1987年8月28日, 1♀.

Macroglossum bombylans Boisduval ヒメクロホウジャク

1988年9月18日, 1♂, 1♀。9月に盛んに飛んで訪花するのは、今のところホシホウジャクと本種の2種だけである。

(いのうえ ひろし 画358 入間市仏子 311-2)

宮代町のミドリシジミ

塘 久夫

1. はじめに

ミドリシジミが埼玉県の蝶に指定されたことを機会に、宮代町のミドリシジミの生態について紹介してみたい。宮代町は県東部に位置する面積16km²ほどの小さな町で、水田とブドウ畠が広がる典型的な平野部の農村地帯である。しかし東京まで電車で1時間ほどの距離にあるため、宅地化も急速に進んでおり、あちこちで林を切り倒し、沼を埋め立てての宅地造成が行われている。現在ではまだあちこちにハンノキが点在し、ミドリシジミもまだ町内に普通に見られるが、開発が進んでいるため、生息環境の保全はかなり深刻な状況である。

2. 分布

ミドリシジミの生息を確認した地点は図1に示したように町内13ヶ所で、おおむね町内全域にわたって見られる。さらに隣接する市町村の久喜市、春日部市、杉戸町、白岡町でもミドリシジミの生息が確認できる。食樹のハンノキは、水田の周囲や川の土手あるいは雑木林の中など湿った場所に多く、町内13ヶ所のポイントはほとんど湿った場所である。いずれの発生地でも個体数はそれほど多くはないが、場所によっては多産するポイントもあり、地点①や地点⑨では、おびただしいと表現できるほど多くの個体が見られる。また地点④は東武鉄道和戸駅からわずか100mほどの商業地のすぐ裏手にあり、ハンノキはわずか2本しか残っていないが、ここでもミドリシジミは少数ながら毎年発生を繰り返している。今のところ宮代町ではミドリシジミはハンノキが5~6本もあれば必ず見られると言ってもよい程度に普通に見られる蝶である。ただし地点④のように、数年前までは確実に見られたのに、最近(昭和61年以降)は生息が確認できないポイントもあり、今後に不安もある。

3. 成虫の出現時期

過去11年間の観察結果では、もっとも早い発生は6月13日(昭和62年)、もっとも遅い出現は6月28日(昭和59年)であった。昭和62年は暖冬に続き暖春であった年で、生物の季節の進み方が異常に早かった年である。また昭和59年は冬に雪が多く、寒冬の年であった。平均的には6月20日から22日が、成虫の初めて見られる日である。今年(昭和63年)は6月18日がミドリシジミの初見日であった。(ただ

し、筆者は土日曜にしか観察していないので、これよりさらに数日程度出現は早い可能性もある。♂個体数がもっとも増えるのは、例年6月下旬から7月上旬で、この時期には夕日を背景に、♂同士の華麗な♂♂の舞いが繰り広げられる。♀は7月上旬までに姿を消すが、♀は7月中旬までは見られ、時として8月に入っても生き残った個体が見られることがある。

4. 成虫の活動

♂の晴天時の活動時間は夕刻5時から7時頃までで、この時間には雑木林の樹冠から中枝付近を活発に飛び回り2~4頭での♂♂飛翔もあちこちで見られる。午前中及び午後は全く活動しない。早朝は林縁のかなり低い位置の枝や下草で翅を閉じて休んでいる。地点①は周囲が水田であるためか、稲の葉先に止まっている個体も見られる。この時間に林を叩くと驚いて飛び出すが長くは飛ばず、すぐに近くの葉先などに静止する。曇天時は午前中あるいは日中であっても時おり活動するが、活発ではなく、比較的短時間飛んでは近くの葉に止まる。止まった直後は翅を閉じているが、しばらくすると翅を開く。曇天時の夕刻の活動は晴天時よりも若干早い時刻から始まり、4時頃から活発な飛翔が始まるが、晴天時に比べると活動はいくらか鈍い。雨天時は葉の上面に静止して全く活動しない。林縁の葉先に止まった個体は強い雨が直接翅に当たることがあるが、それでもじっと翅を閉じて動かない。雨が小雨の場合には曇天時とほぼ同様の活動をする。

一方、♀は♂に比べ全般に活動は鈍く、午前中は林の下草付近、午後は低い位置の葉先に静止している。たまに飛び立った時でも長くは飛ばない。止まった直後は翅を閉じるが、しばらくすると翅を開くのは♂と同様である。夕刻になつても♂のようには活発に活動せず、林縁の葉先に止まっていることが多い。

5. 変異

異常型と言えるほどの変異のある個体は見られないが、♂ではまれに前縁~前後翅外縁が紫色の光を帯びる個体が見られる。またごくまれに前翅2室~5室にかけて青色の光のある個体も見られる。♀の班紋はA、B、O、ABの全ての型が産する。地点①における昭和61年から昭和63年の4年間の調査では、採集個体21頭のうちB型が13、O型が6、AB型及びA型が1、また確実な目撃記録(主として写真撮影した。)では51頭のうちB型が34、O型が12、AB型が3、A型が2であった。したがってこの場所における各型の比率はA:B:O:ABがおよそ4%:65%:25%:6%である。ただしB型とO型との班紋の変化は連続的であり、いわゆるBO型も多数見られた。(ここではB型として数えた。)またO型とA型との差異は小さく、この変化も連続的である。(ここでははっきりとA型と認められる個体以外はO型として数えた。)

6. おわりに

以上述べてきたように、宮代町ではミドリシジミは今のところ普通種と言える。しかし生息ポイントはいくつかの例外を除いては、いずれも住宅地の中に取り残されたような小規模な林が多く、いつまでこの林が残されるのか心配な点も多い。ミドリシジミが将来とも生息できるような環境の保全を望んでいる。

表1 宮代町におけるミドリシジミの発生場所

地点番号	所在地	環境概要	ミドリシジミの生息状況
①	宮代町和戸 906 [沖野山]	40m四方程度の雑木林。クヌギが主体でヤナギやダンコウバイ、ネズミモチなどが混じる。ハンノキは林の裏手に7~8本。林縁は笹藪で周囲は水田。	多数のミドリシジミが見られる他、ミズイロオナガシジミも生息している。
①-2	宮代町和戸 906	地点①から100mほどの距離の25m四方程度のハンノキ林。下草にスイカズラがあるがほとんどハンノキの純林。	個体数は比較的多い。
②	宮代町和戸 890	農家の屋敷林でエノキとハンノキが數本ずつ植えられている。同様の農家が何軒かある。	少ない。生息が確認できない年もある。
②-2	宮代町和戸 890	地点②とは県道をはさんで反対側にあり水田の端にハンノキが2本とクヌギが3本植えられている。片側は水田でもう一方の側が県道に面している。	個体数は少ないが毎年確実に見られる。
③	宮代町国納 422 [宮代台]	備前前堀川の土手に沿ってハンノキが4本ある。すぐ近くに稻荷神社の森がありそこにも數本のハンノキがある。	昭和60年までは少數ながらミドリシジミが見られたが昭和61年以降、生息が確認できない。
④	宮代町国納 300	住宅地の中に取り残されたような小さな林。ハンノキは3本ある。	少ない。生息が確認できない年もある。
⑤	宮代町西条 原1019	備前堀川沿いに広がる100mx30mほどの雑木林。クヌギとイヌシデが主体でエノキもあり、ハンノキは巨木が4本ある	毎年確実にミドリシジミが見られ、数も多い。
⑥	宮代町和戸 4-11	商業地のすぐ裏側の空き地。路地の端に2本のハンノキが残っている。	ごく少數ながら、毎年発生が繰り返されている。
⑦	宮代町東条 原195	神社裏手に広がる60m四方ほどの雑木林。コナラ、クヌギ、イヌシデ、ケヤキ、スギが多く、ハンノキは巨木が1本だけ。	非常に少ない。過去に生息を確認したのは昭和61年と昭和62年の2年間だけ。
⑧	宮代町西条 原677	水田の間に残された30mx10m程度のハンノキ林。ハンノキは10~15本ある。	普通に見られる。
⑨	宮代町山崎 208	水田の中にある30m四方ほどの小さな雑木林。クヌギが多く、エノキ、スイカズラなどの他ハンノキは數本。下草はチジミザサの笹藪。	個体数は比較的多い。ここでも♀はA,B,O,ABの全ての型が見られる。
⑨-2	宮代町山崎 208	地点⑨とは200mほどの近さにある。松や杉が主体の雑木林だが規模は大きくコナラやエノキ、ヤナギ等もありハンノキも2~3本ある。	少ない。
⑩	宮代町西原 286	農家の屋敷林だが比較的規模が大きくエノキとハンノキが數本ある。	きわめて少ない。過去、昭和61年に♂1頭を目撃した記録があるのみ。

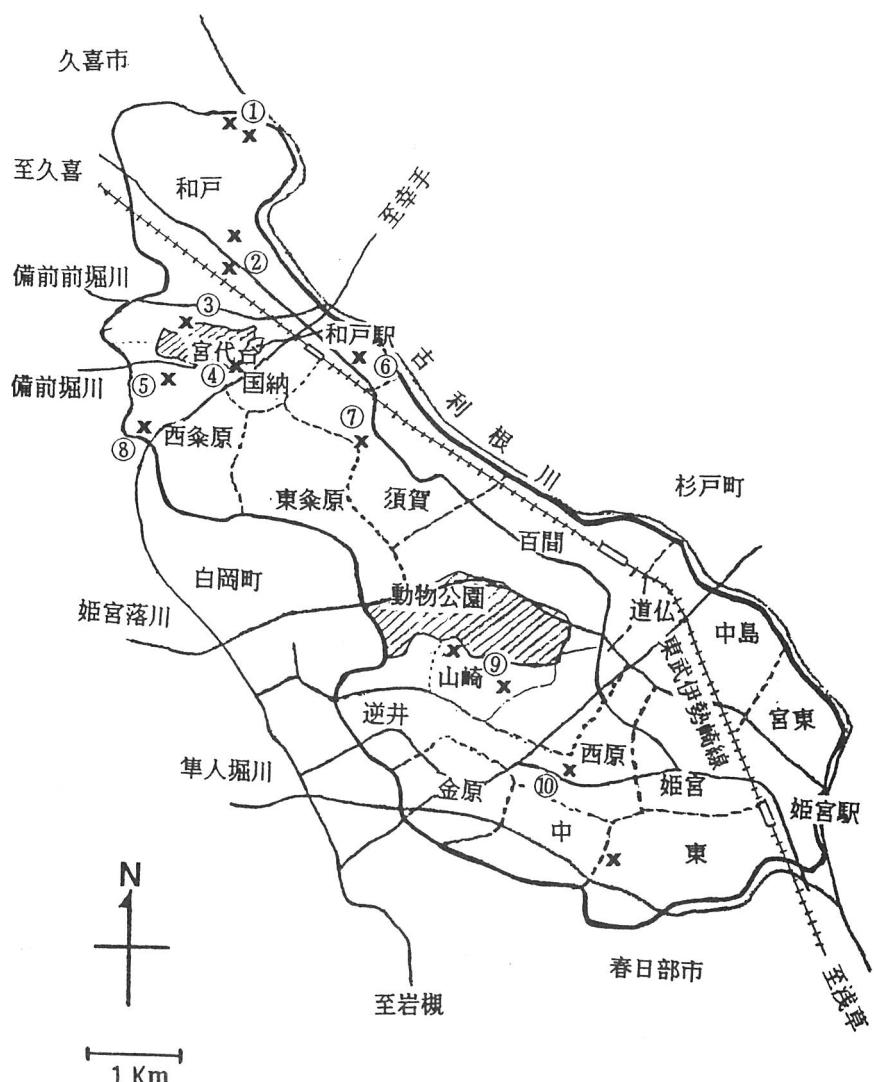


図1 宮代町におけるミドリシジミの発生場所

(つつみ ひさお 画345 南埼玉郡宮代町宮代台 1-20-15)

.....

キタテハの秋型についての仮説

石澤直也

.....

蝶には、同一種でありながら、発生する時季によって、大きさ、色、斑紋、形が異なるものがあるが、これらの現象は季節的多型と呼ばれている。この現象がどのようにして起きるのか、そのメカニズムについては、Danilevskii(1948)や Müller(1955)らが、光周期が季節型の決定要因であることを明らかにした。

その後、多くの研究者によって様々な種について試され、キタテハでは、日高、会田、遠藤らによって幼虫期の短日によって秋型が生ずることが判った。またこの季節型の適応的意義についても、日高らは、キタテハの秋型の翅の裏面の褐色斑は、冬枯れの背景の保護色効果があるといっている。しかし、この他にももっと重要な意義があるといえるのではないか、本題ではその辺について仮説を述べてみたい。

最近キタテハについて書かれた文献では、清邦彦(1986) キタテハの季節型による分散性の違い、月刊むし(184):43 が参考になる。清によると、夏型では分散性がなく、発生地にとどまるが、秋型成虫は発生地以外にも出現するという。その理由としては、適当な越冬場所の探索のほか、越冬前の栄養摂取も考えられるという。

ここで分散性について考えてみよう。キタテハの食草であるカナムグラは人手の加わった場所に群落を形成するが、この蝶の夏型は、清が言うようにこの群落から離れることが少ない。群落のそこかしこに止まり、飛ぶ時はゆっくり翔たき、滑空は余り見られない。秋型はこれとは反対に活発に飛翔し、各種の花、特にキク科の花で吸蜜することが多く、行動範囲が広い。こうして見ると分散性の違いには飛び方も関係しているように思える。

それでは何故夏型と秋型とで飛び方に違いがあるのだろうか。夏型と秋型の♀各1頭を採集（データが少ないと言われるかもしれないが、図鑑で大きさを比較して発表している学者もいるので勘弁して欲しい）して計測したところ、両者とも体重は0.16gで、翅の大きさが秋型の方が一回り小さかった。この翅の大きさの相違は図鑑でも同様であるところをみると、一般には秋型は翅が小さいと言えるのではないだろうか。そうすると、夏型では翅の単位面積あたりの体重（つまり翼面荷重）が小さく、一方秋型は大きいと言えそうである。

この蝶は一般的に明るい所を好む傾向があるので、夏場は体温の上昇が問題になる。飛翔に必要なパワーは、翼長の5乗×翔たきサイクルの3乗に比例するといわれる。夏型も秋型もほぼ同じ質量であることから、飛び立つ時に必要なパワーは両者とも同じとすれば、夏型の翔たきサイクルは、翅長が長い分少なくでき、秋型では翅長が短いのでその分翔たきサイクルを増加する必要が生ずる。

一方、筋肉の供給しえるパワーは、一般的には、筋肉の質量（つまり翼長の3乗）と翔たきサイクルの積に比例するというから、夏型では翅を除く質量は小さいはずで、翔たきサイクルも少なく、パワーは小さくなり、体温の上昇は避けることができるが、パワー不足で移動距離を長くするのには不向きになる。

また秋型では、翅の長さの短い分筋肉の質量は夏型と比較して大きいと思われるから、供給しえるパワーは大きい。この辺が秋型の飛び方が活発に見えるところのようである。

しかし、活発に翔たけば、その分エネルギーの消耗は大きくなるが、秋型の飛翔をよく観察すると、翔たきは飛翔のうちの初めだけで、多くは滑空を利用しているのがわかる。秋型の翅は小型であるが、翅の体軸に平行の部分の幅は夏型よりも狭くなっている、翅長の2乗と翅の面積との比、つまりアスペクト比は、秋型の方が大きいはずである。

アスペクト比が同一で、翼の大きさが違う場合、小型の翼の方が、空気の粘性が効き、摩擦抵抗が大きく、その分揚抗比が悪くなり、滑空比（水平距離／高度差）も悪くなるという。秋型の翅では夏型よりも小型でも、翅の外縁部分の切れ込みが深くなっている。夏型の翅形と同一であると仮定したよりは滑空比は悪化せず、むしろ滑空性能を高めている可能性がある。また翼面荷重は秋型の方が大きいので、前進速度は速く、それが慣性として働き滑空に適しているのではないかと思える。

このように、秋型の翅の形は、飛翔によるエネルギーの消耗を少なくして、その分散性を高め、越冬に必要な栄養を飛翔に無駄に費やされないようにしているのに役立っているようだが、ほかにも機能があるように思える。ベルクマンの法則を借りれば、体が大きいものは、体重当たりの体表面積が体の小さいものより小さいから、体力の消耗が少なく耐寒能力があり、寒帶などの動物が大型なのはこのためであると言われている。従って、キタテハの秋型では翅が小さいことはその分体表面積が小さく、また翅を除く部分、つまり胴体は皮下脂肪を貯えて重く、夏型に比べて体重当たりの体表面積も小さくなることから、越冬には有利に働くと思われる。

昆虫の越冬で、オオムラサキの幼虫の場合、体が大きく、体重の重い個体はエノキの根元の北側に分散して越冬することが多く、これら大きい個体は春の生存率が高いことが最近確かめられた。このことからも、キタテハの秋型については、越冬への耐寒能力の保持としての機能があると推察される。

また、秋型の翅の濃い色彩については、気温が低い晚秋や春先には、太陽熱を吸収して体温の上昇に寄与していると思われ、これは翅型の飛翔性能の向上とあいまって、活動性を高めていると思われる。

以上をまとめると、キタテハの秋型は、その翅型や体型、色彩が、滑空性能を高め、その分経済的に飛翔することができ、体温の維持能力が高く、分散性を高めるのに役立つており、かつ越冬にも有利に作用していると思われる。

しかし、今回のは実際に実験して見た訳ではなく、あくまで仮定に過ぎない。翅型については、今後風洞による実験が必要であろう。また耐寒能力についても、野外で越冬させ、その消耗度合をみる必要がある。またキタテハには、ルリタテハやサトキマダラヒカゲなどのように、気温の低い時に体を震わせて体温をあげる内温性が備わっているのか、もし備わっているとしたら、翅の短い秋型には翅たきやすいから有利になるが、その辺も探ってみると面白いかも知れない。

[参考文献]

- 清 邦彦 (1986) キタテハの季節型による分散性の違い. 月刊むし(184):43.
- 原 聖樹 (1988) キタテハは史前帰化昆虫か 1~2, 日本の生物, 2(1):49~53.
(2):41~45.
- 日高 敏隆 (1983) 動物の体色 (東京大学出版会)
- 矢田 修 (1984) チョウの季節型と休眠, 遺伝, 38(13):20~25.
- 東 昭 (1986) 生物・その素晴らしい働き (共立出版)
- 国蝶オオムラサキを守る会 (1987~1988) 越冬幼虫調査会報告,
雑木林からのたより, 5(1, 2), 6(1).
- 福田 晴夫 ほか (1983) 原色日本蝶類生態図鑑 (II) (保育社)

(いしづわ なおや 画359 所沢市山口 1644-15)

.....

「タカネヒカゲに会わざる」の記

小野寺 博昭

.....

1988年8月10日(水)

蓼科出張から帰宅したのが前夜11.30P.M.下田氏に「今日は行けないので1日延ばしましょう。」と電話したところ、極めて不本意そうな様子だったので、結局妻に上尾まで送ってもらい、下田氏には上尾まで迎えに来てもらって出掛けることにした。目的はタカネヒカゲの観察。目的地は北アルプス雪倉岳。

1.25A.M.に上尾をスタートし、今月3日から開通した中央高速道の延長「長野道」の梓川P.A.には5.30A.M.に到着。ここはクロツバメシジミの生息地で、道路開通により相当影響を受けてしまったという。水田が近いため、G.S.の灯火にガムシやゲンゴロウが随分集まる。

30分休息し、給油をして6.00A.M.に梓川P.A.を後にして豊科I.C.で降り、国道148号線をひたすら北上する。7.30A.M.に青木湖、7.45A.M.に白馬を通過、国界橋を8.15A.M.に渡って新潟県糸魚川市に入る。8.23A.M.に平岩で国道148号と別れを告げて、9.30A.M.に蓮華温泉に着いた。

1時間10分の休息の後、10.40A.M.愈々登山開始。コースは瀬戸川、鉱山跡、鉢ヶ岳(2,563m)を経て、雪倉岳(2,611m)に至る最も厳しいルート。

天候は曇り空で、暑くなく寒くなく、登山にはもってこいの陽気。約1時間半後、瀬戸川に着いた。ここが第一の難関で、ルートを示すスプレー式赤ペンキで岩に付けた○印が対岸に見えるものの、流れは急で、とても素直には渡れそうもない。それでも比較的渡りやすそうな地点を選んで、大きい漬け物石といった感じの思い石を約20個ほど下田氏と二人で川に投げ入れたり積んだりして足掛かりを築いた。最後の部分は飛び越えられるかどうかのきわどい所を、リュックを残して先ず下田氏が跳ぶ。日頃鍛えているだけあって中々見事だ。リュックを二つ下田氏に投げ渡して、愈々自分の番だ。意を決して思いっきり跳ぶ！何とかセーフ。……ここで約30分を費やしてしまった。

後は暫く鉢巻状のルートが続く。途中はヒメキマダラヒカゲとクロヒカゲが翔んでいるくらいだが、特に前者は多く、しかも新鮮な個体が多い。(8月7日の那須高原では既に破損した個体が多かったのだが。) そのヒメキマダラヒカゲも、1,800m地点くらいからは全く見られなくなってしまった。約1,900mの所からは一旦下り沢を渡る。この沢の水は雪渓から流れて来ているだけあって、とても冷たくて旨い! 水筒に詰める。沢を渡ると愈々目的の雪倉岳を目指す登り口だ。最初のうちはミヤマリンドウや、紫やピンク、黄色や白の可憐な小さな花を付けた高山植物を眺めるゆとりのある比較的登りやすい道だったが、標高2,000m辺りから急に陥しさを増した。

2,400m付近から霧と小雨になる。2,450mくらいからハイマツが漸く姿を現す。

2,500m地点に達すると霧で殆ど周囲が見えず、雨も強くなりだした。

コマクサがそこかしこに生えており、ライチョウにも出会った。ライチョウは声を掛けても逃げず少し移動する程度で、ひょっとするとこのライチョウは人間を見たことがないのではないかと思ったくらいだ。

稜線に出たのは登山開始後6時間10分を経た4.50P.M. ここは靈気が漂い突風が吹きすさび、急速に体温が失われる。まるで「タカネヒカゲに近づくな!」とでも言っているかのようだ。一度はリュックを背負ったままハイマツの繁みまで突風で飛ばされた。お陰でハイマツの中は意外に温かいことが分かったが、身体が濡れ、寒さで歯の根が合わない。下田氏は突風に見舞われた時は、飛ばされそうになりながら、必死で標識にしがみ付いたそうだ。優に瞬間風速は30mや40mはあっただろう。

稜線付近の標識は倒れていたり、地図と逆になっていたり他の目印は無く、雪倉避難小屋へのルートも見付からず、途方に暮れた。やがて下田氏が「小屋が見えた!」と言うので、突風と雨の中を夢中でそこまで行ったが、辿り着いてみると、そこには小屋は無く、横長の長方形の岩があるだけだった。この頃にはオーバーではなく本当に「遭難」の二文字が脳裏にチラついた。下田氏はタフで、まだ若干の余裕を残していたとみえ、「コマクサをせめて一株持って行こう。」などと言う。自分はそれどころではなく、寒さから来る疲労と不安とで震えが激しくなる一方。歯をガチガチさせながら、激しく首を横に振るだけ……。下田氏もコマクサを踏め、私がセーターとウィンド・ブレーカーを身に付けるのを手伝ってくれた。あと1時間ほどの地点にある筈の雪倉避難小屋を見付けるか、それとも再び6時間余りを要する下山の途を辿るか迷ったが、下田氏の「小屋を発見出来なかったら危ない。下山しましょう。」の決断で、下山することにした。

険しいガレ場を下り始めたが、赤ん坊の頭くらいの岩礫がガラガラ音を立てて遙か下の方へ落ちて行く。生きた心地がしない……。

二人が一列になって下りたら頭に当たる危険が大きいので、気は急くが横列で少しずつ下る。登って来た時の道を見失ったので、険しいガレ場が続き、時には折角辿り着いたと思うとそこは絶壁で後戻りを余儀なくされる。悪戦苦闘し、かなり危険な目に遭いながら、漸く登った時の山道を見付けた。到底蓮華温泉に辿り着くのは無理だが、とにかく出来るだけ標高の低い所まで下りようということになった。

自分の体温はセーターとウインド・ブレーカーのお陰で徐々に回復して来たが、疲労で身体が思うように動かない。途中暫くの間、重い私のリュックを下田氏が代わって背負ってくれ、私は下田氏の軽いリュックを背負う。先頭に立って歩いていた下田氏が途中からは、私がはぐれる事を懸念して、励ましの言葉をかけながら私を先に歩かせる。日頃はわりとぶっきらぼうな感じを与える下田氏だが、こういうピンチになって、いたわりの心の持ち主であることが分かった。

雪渓は夜目にも白く、ここは無事に渡ったが、1,950m地点に至ったのは既に7.55 P.M.で、もはや山道もおぼろ気にしか見えない。丁度、周囲は雨風が凄いのに、そこだけは風が殆ど当たらない樹木の下になる場所があったので、覚悟を決めて野宿（とても「野営」などという格好の良い代物ではなかった）することに決めた。自分は、当初は雪倉避難小屋の屋根の下で使う予定だったシュラーフを取り出し、靴を脱いでもぐり込む。体温を取り戻したせいか、むしろ暑いくらいだった。

一方、下田氏はリュックに入れてあったトレーナーやズボンをはき、運良く今日大町のスーパーで買った上下セパレート型のレイン・コートで寒さを凌ぐ。暫く寝入って目を覚ますと下田氏が私に声を掛け、「3.30A.M.くらいになりましたかね?」と言う。ライターで時計を照らしたら、まだ1.30A.M.。本格的に寒くなるのはこれからだ。明け方は下田氏も相当寒かったらしく、1時間ほど寝入ったら、身体が冷たくなり、歯がガチガチ鳴って震えが止まらなくなったので、眠らずに起きていたそうだ。小用を足したら震えで最初から最後まで小便が波打ち放しだったと言う。もし雷雨か豪雨に遭っていたら二人共駄目だったかも知れない。

1988年8月11日(木)

当初は蓮華温泉に向けて4.00A.M.に出発する予定だったが、曇り空のために仄暗く道が定かに見えないため、1時間待って5.00A.M.に再び下山し始めた。

往路とは大違いで二人共膝はガクガク、大腿四頭筋は一寸体重が掛かると痛く、おまけに昨日の例の漬け物石のお陰で大胸筋や腰も……と身体のあちこちが悲鳴を上げる。しまいには下田氏は足を引きずり始め、木の枝を杖に使う。私もノロノロと進む。

前日は軽やかに跳んでいた僅か25cm程度の段差も今日はこたえる。まるで傷痍軍人か敗残兵の行軍といった風情だ。

最初の難関、崩れやすく足が片方しか乗らない切り立った崖は何とか乗り越え、第二の難関、瀬戸川には6.50A.M.に到着。川は夜来の雨で増水しており、又、昨日のような跳躍力は二人共とうに失せ、再び漬け物石を持ち上げるだけの腕力も気力もなく、木を数本渡してきわどい橋を架けて中洲を渡り、もう一つ対岸への橋を架けた。お陰で昨日より短い時間で渡河出来た。人間むしろ体力が弱った時の方が頭を働かせるものらしい。雨の中、木陰で朝食をとり、7.35A.M.に再度出発。8.35A.M.に漸くにして蓮華温泉に辿り着いた。二人共体力を消耗し、身体はガタガタだったが、気力はすっかり回復し、「いやあ、我ら四十代の体力も中々大したものだ。」「そうそう、クロスカントリー、フィールド・アスレチック、それにウェイト・リフティングまでやったんだから……。」と自画自賛。それと蝶屋の性か「ありゃーやっぱり雪倉岳の方に行った方が良かったかなあ。」「これで鉢ヶ岳までは自信が付いたから、もう少しイザという時の準備をして数年以内にもう1回挑戦しよう。」などと、あわや二つの母子家庭を作る寸前だったことなどコロッと忘れてしまっている。

極めて貴重な体験をしたことだけは確かだ。

いずれにしても、葬儀委員長として碓井徹氏の手を煩わし、埼玉昆虫談話会による合同慰靈祭など開かれることなく、竹内崇夫氏より「……ここに蝶に狂い、哀れタカネヒカゲに会うことなく終わった二人に対し、心から哀悼の意を表し……」云々とワサビの効いた弔辞を読まれることなく、本当に良かったと思う。

(おのでら ひろあき 画363 桶川市泉 2-19-50-4-119)

【訂正】

◎ 寄せ蛾記 52号 p.904-913

牧林 功・江村 薫：埼玉県所沢市三ヶ島産半翅系昆虫類

p.904 本文6行目 (誤) 立川周三, ⇒ 立川周二 (正)

立川先生には大変ご迷惑をおかけいたしました。御詫び申し上げます。

◎ 寄せ蛾記 51号 p.898

【訂正】の2件目

本誌50号のp.842の採集日の訂正に関して

1986年8月24日を1985年8月4日に訂正する旨の記述。

正しい訂正は、採集年の1986年(誤)を1985年(正)にするのみ。

すなわち、正確な採集日は1985年8月24日。ということである。

・・・・・

見沼でみつかったアカガネオサムシ

吉 起 肇

・・・・・

見沼たんぼ周辺の昆虫の調査が今年の春から進んでいるが、浦和と川口の調査区でアカガネオサムシ (*Carabus granulatus* ssp. *telluris* BATES) が生息していることが明らかになった(注1)。甲虫屋の1人として、ついに出るものが出了か、と多少オーバーに言えばそういう気持ちでいるが、以下に、これまで知られている同地域での本種の採集データを記し、若干解説をしたい。

[採集データ]

1♀, 1♂ 川口市行衛 1987-V-21, 築比地 秀夫 採集. (トラップにて)

このうちの♀の個体が、本誌の表紙の写真の個体である。

1♀, 1♂ 川口市行衛 1987-V-22, 清水 哲雄 採集. (トラップにて)

5♀, 1♂ 川口市行衛 1987-XI-21, 清水 哲雄 採集. (朽木より)

1♀ 川口市行衛 1987-XII-30, 清水 哲雄 採集. (土中より)

1♂ 浦和市明神下 1988-IV-17, 巢瀬 司 採集. (トラップにて)

1♂ 浦和市明神下 1988-V-15, 巢瀬 司 採集. (トラップにて)

[見沼たんぼとアカガネオサムシ]

このオサムシは体長が20~25mmぐらい、上面に弱い緑銅色を帯びていることが和名の由来となっている。種の分布は広く、S. ブロイニングの有名なモノグラフによると西はフランス、アイルランドから中~東欧、シベリア全域を経て極東アジアに至っている。日本はその中で最も南に位置する産地にあたるが、現在は北海道と本州東北半のみから知られ、かつ本州における産地は一部の湿地に限られている（北海道の亜種 *yezoensis* は湿地だけでなく山林などにも広く生息しているが、その違いのわけは何故か？）。とにかく青森から神奈川にかけての各県下において、産地はわずか一~数カ所ずつ知られ

ているにすぎず、全くの点状の分布となってしまっている。しかもその中の何ヶ所かは、ここ数年の間に整地されたり埋め立てられて失われ、標本が既に記録品的扱いになってしまっている。湿地といえば潰し、それを土地の有効利用と考える現代日本人と同時代を共有する彼らにとって、将来に赤信号が点滅していると言っても過言では無い状態まで来ているのだ。

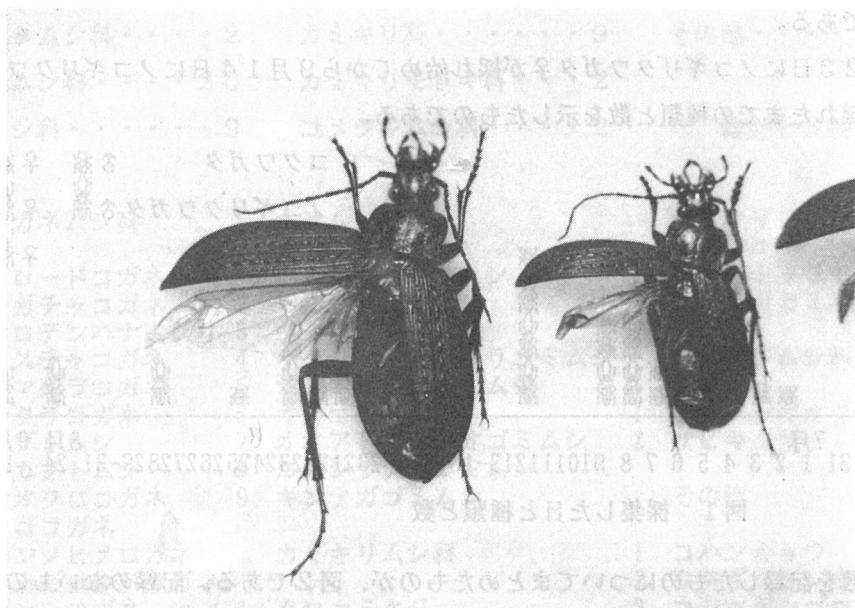
関東地方では栃木県の渡良瀬遊水地と千葉県の北西部一帯（野田～柏）が本種の産地として有名だが、埼玉県からは最近確実な産地が知られていなかった。浦和の秋ヶ瀬や利根川にいた、ということを聞いたこともあるが、今は採集されていないようだ。実はアカガネオサムシの新産地をみつけてやろうと、ここ数年県下のめぼしい場所（加須低地とか岩槻市周辺、特に野田に近接した金杉台地など）を調べていたが、ついに確認することができずに今に至っている。それが県内でも東京寄りの、周囲の宅地化が進んでいる見沼で記録されようとは。野田の産地が遠くないので見沼で発見されても何の不思議か、と思われるむきもあるかもしれない。しかし、谷地を主体とした、入り組んだ地形の野田の生息地と、人の手が入り易かった見沼ではその意義は違うと思う。見沼同様の地形的条件にありながら、今では失われた生息地ははるかに多いだろう。

このオサムシの先祖は、まだ日本が大陸と地続きだった頃にやって来た。そして当時はあちこちに広がっていた平地の湿原を中心に、連続的に分布していたに違いない。その後、農耕を覚えた人間達により湿原の改変が進んだが、その多くは「田んぼ」という、まだこの虫の生息を許す状態に保たれていた。戦前は津軽地方の湿田で本種がかなり見られたという。また河川敷にも湿地が広がっていた。ところが最近の田んぼは大型機械で掘り起こしてから真っ平にし、農薬をたっぷり施す、そういうものに変わってしまった。夏の夕暮れ時に蛙の鳴き声が聞かれないような、ただの「水をはった畑」にはアカガネオサムシだって住むことはできない。大きな河川敷も多くがゴルフ場と化した。見た目にはグリーンの芝も、コンクリートを緑色に塗ったようなものだ。おまけにコガネムシの幼虫を駆除するために大量の殺虫剤を使う。小さな湿地的環境にかろうじて生き延びてきたものたちも、今では先に述べたような状態にさらされている。だからアカガネオサムシがいた、ということは、見沼が長い間、湿地としてのある環境的レベルを保ち続けてきたことの証拠と言って良い。それをホタルやタガメがたどったのと同じような運命に、再び彼らは追いやられようとしているのだろうか。なるかな昔、日本にやってきた時から今に至るまでに較べれば、まばたきでもするぐらいの短いあいだに……。

[アカガネオサムシの特異な形態について]

オサムシといえば後翅が退化して飛べないものと、カタビロオサムシ各種のように後翅があって飛ぶことができるグループがあるが、分類的には前者に属しながら、なんと

アカガネオサムシには翅の生えたやつがいるのだ。これは種内における多型と考えられるが、地域によってその出現性には違いがあり、青森県津軽、山形県庄内地方、新潟県北蒲原などのものは退化している（とはいっても、アオオサムシなどに較べると退化途上という感じ）が、宮城県北上川、関東の野田、渡良瀬などのものは、飛んでも不思議ではないほどの立派な後翅を備えている（写真を参照）。このような二型性（中間の形態があるのかどうか）が生じる原因については今のところ明解な説明はなされていない。飛べないはずのオサムシの後翅の「実用性」には、今後観察が必要のようだ。



(写真. アカガネオサムシの後翅 / 大野 勝示氏 撮影)

左の個体：千葉県野田市産 ♀. 右の個体：山形県東田川郡三川町産 ♂.

(注1) 次の文献に、アカガネオサムシが、いわゆる『見沼たんぼ』に該当する川口市のある地区で記録されている旨の記述があるが、文献の性格および記述内容とも採集データの記録としての体裁をとっていない。

(財) 日本野生生物研究センター： -埼玉県委託調査- 県立自然公園保全活用計画策定基礎調査 県立安行武南自然公園, 昭和61年3月.

(よしこしはじめ 画330 大宮市櫛引 2-499-2-802)

高層住宅の灯火に飛來した甲虫

—浦和市三室で1987年5月から11月まで観察—

利根川雅美

息子の雄也（小3）が1987年5月から11月まで高層住宅の灯火に飛來するクワガタやカブトムシやその他の甲虫を採集した。1階から9階の廊下や階段を、ほとんど毎日まわったものである。

図1は6月23日にノコギリクワガタ♀が採れ始めてから9月14日にノコギリクワガタ♀が最後に採れたまでの種類と数を示したものである。

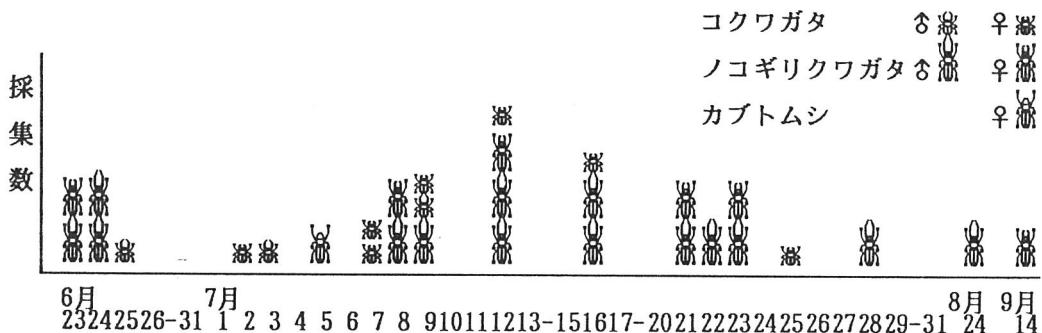


図1 採集した日と種類と数

採集した階数を記録したものについてまとめたものが、図2である。記録のないものもあるので図1の採集数と同じではない。1階から5階までは13室、6階は12室、7、8階は10室、9階は6室という構成であることと地上高を考え、8階で多いというのは興味深い。

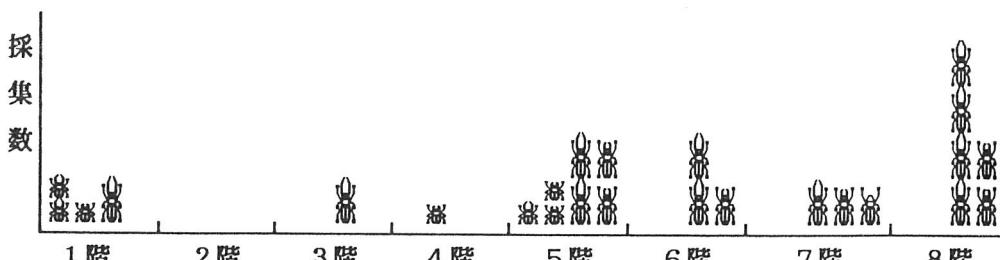


図2 階数毎の採集数

採集数をまとめてみると、つぎのとおりである。

コクワガタ	3 ♂	8 ♀	計 11
ノコギリクワガタ	15 ♂	6 ♀	計 21
カブトムシ	-	1 ♀	計 1

その他にも多くの甲虫が採れたのでまとめてみた。

※ 科ごとの種類数

クワガタムシ科	2	カミキリ科	9	その他	9
コガネムシ科	20	カミキリモドキ科	2		
オサムシ科	9	コメツキムシ科	2	総計	15科 53種

コガネムシ科	オサムシ科	カミキリモドキ科
1 ビロードコガネ	1 ウスアカゴモクムシ	1 アオカミキリモドキ
2 ナガチャコガネ	2 マルガタゴミムシ	2 シリナガカミキリモドキ
3 シロテンハナムグリ	3 ウスケゴモクムシ	
4 ウスチャコガネ	4 キクビアオアトキリゴミムシ	コメツキムシ科
5 セマダラコガネ	5 セアカヒラタゴミムシ	
6 サクラコガネ	6 オオゴモクムシ	1 アカアシオオクシコメツキ
7 カブトムシ	7 オオアトボシアオゴミムシ	2 サビキコリ
8 コカブトムシ	8 コガシラアオゴミムシ	
9 オオクロコガネ	9 キンナガゴミムシ	その他
10 クロコガネ		
11 ハンノヒメコガネ	カミキリムシ科	1 コハンミョウ
12 アカビロウドコガネ		2 クヌギシギゾウムシ
13 センチコガネ	1 クロカミキリ	3 コシマゲンゴロウ
14 ドウガネブイブイ	2 ノコギリカミキリ	4 コクロシデムシ
15 ヒメコガネ	3 ゴマダラカミキリ	5 ナガヒラタムシ
16 ヒメカンショコガネ	4 クワカミキリ	6 ヒゲブトハムシダマシ
17 コフキコガネ	5 キボシカミキリ	7 ナミテントウ
18 クロカナブン	6 ミヤマカミキリ	8 コクロナガキマワリ
19 スジコガネ	7 マジノマダラカミキリ	9 タマムシ
20 コアオハナムグリ	8 ムナクボカミキリ	
	9 マルクビケマダラカミキリ	

高層住宅で昆虫が採れるということで興味をもたれ発表を勧めてくださった市川和夫氏に、また、同定を行ってくださった小堀文彦氏に感謝いたします。

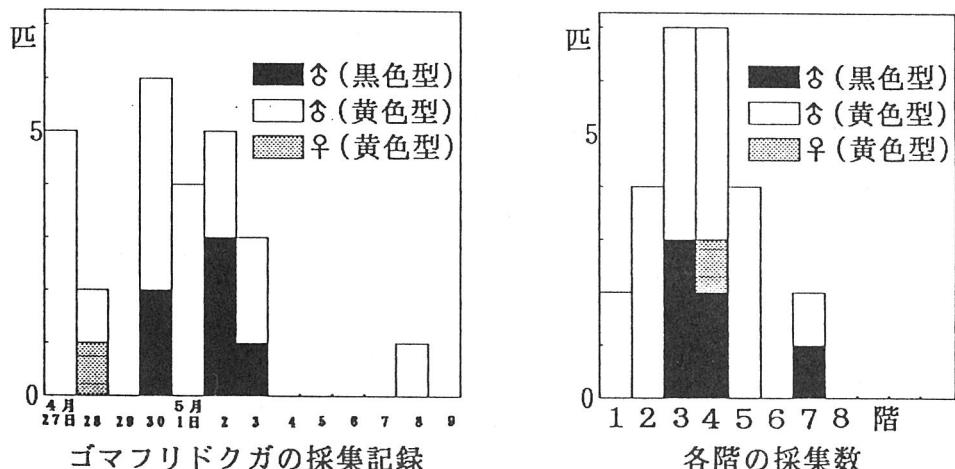
(とねがわ まさみ 番号 336 浦和市三室 1218-3-807)

浦和でゴマフリドクガを採集

利根川 雅実

埼玉県初記録のゴマフリドクガ *Euproctis pulvrea* (Leech) を採集したので報告する。採集場所は浦和市三室の自宅（高層住宅）である。1階から8階までの廊下の蛍光灯に集まる蛾を採集しているが、1988年4月27日午後9時30分頃、黄色型の♂5頭を採集し、同年5月8日まで採集できた。すべて天井にとまっていたが、天井は淡緑色なので非常に良く目立った。採集日と採集数は下図のようである。採集時間は午後8時から11時の間であった。

4月26日以前も観ていたが採集できていない。5月9日以降も毎日観ているが、ゴマフリドクガは採集できていない。



昨年(1987年)については完全に採集を行ったわけではないが、4月29日に黒色型1♂、6月7日に黄色型1♂が採集されていた。今後とも観察を続けたい。

なお、同定を行い、発表をすすめて下さった市川和夫氏に感謝いたします。

(とねがわ まさみ 画336 浦和市三室 1218-3-807)

狭山丘陵でウスバシロチョウを観察

萩 里子 豊

1988年5月14日午前11時ごろ、所沢市三ヶ島の狭山丘陵で、ゆっくりと飛翔中のウスバシロチョウを1頭観察・確認したので報告する。

場所は、早稲田大学校地西側のぶどう畠やモモ畠がひろがる所で、いかにもウスバシロチョウが好みそうな環境になっている。当日の天候は晴れ時々くもりで、風はほとんどなく、地表面すれすれのところをゆるやかに飛んでいた。

狭山丘陵におけるウスバシロチョウの記録としては、世田谷昆虫愛好会発行『羽化』No. 6所載の「宮寺地区南部及び狭山丘陵北西部の蝶」(会田稔ほか)にリストアップされているものの、その詳細は不明である。狭山丘陵産のチョウに関するまとまった報文である松丸政雄の「多摩湖・狭山湖における蝶類の分布」(『昆虫と自然』1970年)では、ウスバシロチョウは確認種に入っておらず、そのうえ“近くに産地があるが分布しないと考えられる種類”とされている。

当日及び1988年のシーズンには、その時のたった1回限りの目撃であり、単なる偶産種であったのか、今後定着の方向に向かう兆しなのか判断しにくいところである。ただ、狭山丘陵は加治丘陵や草花丘陵などのウスバシロチョウの産地と環境的にそう大きなちがいはないため、これから推移を興味深く見守っていきたいと思う。

(おぎの ゆたか 画358 入間市宮寺284)

コカブトムシが高層住宅の灯火に飛来

利根川 雅実

1988年8月30日午後11時30分頃、浦和市三室の高層住宅の7階の705号室のドアの隅にうずくまっていたコカブトムシの雌を採集した。

昨年1987年にも6月24日午前6時頃、8階で雄を採集した。

コカブトムシ 1♂, 浦和市三室 1987-VI-24.

1♂, 浦和市三室 1988-VII-30.

(とねがわ まさみ 画336 浦和市三室 1218-3-807)

寄せ蛾記 53号 目次

井 上 寛	： いるま蛾報(4)	934
塘 久 夫	： 宮代町のミドリシジミ	937
石 澤 直也	： キタテハの秋型についての仮説	941
小野寺 博 昭	： 「タカネヒカゲに会わざる」の記	944
【訂正】2件		947
吉 越 肇	： 見沼でみつかったアカガネオサムシ	948
利根川 雅 実	： 高層住宅の灯火に飛来した甲虫	951
利根川 雅 実	： 浦和でゴマフリドクガを採集	953
荻 野 豊	： 狹山丘陵でウスバシロチョウを観察	954
利根川 雅 実	： コカブトムシが高層住宅の灯火に飛来	954
神久保 美津夫	： カンアオイに蛹化したヒカゲチョウ	955
吉 田 文 作	： 熊谷市でメスグロヒョウモンを採集	955
会 報		956
編集後記		957
〔会員名簿の変更〕		